

## 野戦病院勤務の一年半

香川県 矢木 幸男

私は昭和二（一九二七）年四月、富田尋常高等小学校に入学、昭和十年三月に卒業すると北海道函館の雑貨店に二年間の奉公に行きました。

次いで昭和十二年ごろより大阪の染料生産の化学工場に勤務し青春時代を過しました。そして昭和十六年四月、徴兵検査を受け乙種合格になりました。

この年、昭和十六年といえは十二月八日に大東亜戦争の始まった時期でもあり、乙種合格者でもいずれは戦争に召されることだろうとは思っていました。

翌年の昭和十七年四月一日に郷土の丸亀歩兵西部第三十二部隊に入隊するよう通知があり、家族や友人に見送られ勇躍出征しました。

西部第三十二部隊に入隊すると芝隊に編入され

班の編成がありました。内務班生活には色々ありましたが衛生兵に任ずるということで、五月一日付で善通寺の師団病院に行くことになり、その陸軍病院で約二カ月間の衛生兵教育を受けました。

教育終了後の昭和十七年七月一日付で中支方面へ派遣されることになりました。七月二十日、いよいよ坂出港を出発して瀬戸内海を通り、玄界灘から東シナ海へ出て七月二十四日には上海港に上陸、第四十師団の野戦病院付に配属となりました。

湖南省の喜魚にあった野戦病院では約一年四カ月間勤務に就きました。衛生兵勤務の経験の日は浅かったため、毎日教育を受け、勉強しながら実戦を積み重ねることが出来ました。

その間、昭和十八年八月には兵長を命ぜられました。部隊は湖南作戦、次いで湖北作戦と転戦に次ぐ転戦で大変でしたが、第一線の戦友たちの苦労とは比べられません。衛生隊は次々と送り込まれる負傷者を一生懸命に治療を施しました。手当てして良くなった者は再び戦場に行くのですが、

私たちの看護の甲斐無く亡くなる者も多く、ただ冥福を祈るのみでした。

人の生死の中で、なぜこんな戦争をしたのだろうという疑問に思ったのですが、当時は、そんなことを考えてもどうにもならぬことでありまして。そして昭和十八年十二月伍長に昇進し、下士官に任官となり、任務も薬品の管理とか書類管理も増え大変責任が重くなりました。

当時の戦闘は前進また前進で勝ち進んでいたときで、湖南、湖北両作戦では昭和十九年八月ごろの衛陽進撃、九月の桂林攻略などがあり、昭和十九年九月に桂林総攻撃が済んで間もなく軍曹に進級しました。

次の作戦は広東へ転戦で、昭和十九年十一月、南部粵漢打通作戦は成功して広東省梅閣に到着しました。しかし十一月末より反転作戦が下令されて中支方面に引き返すことになりました。

かくして再び湖南へ向うのですが、これは梅閣には先に到着していた先住部隊の広部隊が平定し

ていた関係だったからと思われました。この反転作戦は地上戦ではなく主に対空戦で、飛行機に対する警戒との戦いの連続でした。かくして戦闘しながら撫湖に到着したのですが、その途中で終戦になりました。

撫湖で昭和二十一年の正月を迎え、武装解除されて捕虜生活になり復員を待ったのですが、いよいよ日本に帰られるようになったのは昭和二十一年五月でした。武昌より舟で上海へ、上海より復員船に乗り、山口県の仙崎港に着いたのは五月二十一日でした。

我が家には五月二十二日無事帰って来ましたが、しばらくの間は、多くの戦友のことを思い、時には夢にその面影が浮かびて安らかにご冥福を祈るばかりでした。